

せいけん
詩集

第二十篇

作：近藤せいけん

「小さい秋」

田んぼの 稲穂が黄色くなった

赤とんぼが 飛び始めた

空が一段と高く 澄んできた

すずめが 忙しく 飛びかう

今年の夏は 暑く 長い

だがやつと 朝晩 気温は下がってきた

小さい秋が 開かれ始めた

夏の終わりを告げる

みんなみんぜミが うるさく

鳴いている

夏から 秋への 別れ目

人の生活に関係なく

季節は訪れる

まだまだ暑い 八月だが

小さい秋が 風に乗って

やってきた

涼しい秋よ 早く来い

「秋風」

まだ、夏の暑い日が続く

毎日 毎日 暑い

しかし 季節は少しづつ

変化している

田んぼの上を 塩からとんぼ

赤とんぼが飛び始めた

日陰に入ると 気持よい

秋風が吹き始めた

八月の終わり 夏の暑さが

がんばっている

「もう そろそろ いいよ」

「そんなにガンバラナイで 海に帰りなよ」

「君も疲れただろう ぼくも疲れた」

夏の季節が

「ニヤッと 笑った」

一陣の秋風が

通りぬけた